谷口善太郎・執筆年表（著作目録）上

秦 重雄

はじめに

1、本稿は、京都が生んだ作家であり、政治家であった谷口善太郎（筆名・須井^{すい}一^{いち}・加賀^か歌^か二^に・田井^た善^{ぜん}三^{さん}など）が執筆したものを取り上げた年表（著作目録）である。

2、谷口善太郎（一八九九〜一九七四）は日本共産党の「京都の顔」として、「たにぜん」と党派を越えて親しまれた政治家であった。一九七二年十二月、旧京都第一区（中選挙区制・定数五）の衆議院選挙において日本共産党の立候補者が二名当選し、京都のみならず全国政界に衝撃が走った。定数五での二名立候補を提案したのが谷口善太郎であった。自らもトップ当選した。

3、谷口善太郎は、清水焼労働者として京都における労働運動家として出発した。小林多喜二「一九二八年三月十五日」に描かれた大弾圧事件は京都でも行われ、谷口善太郎も検挙された。拘留中に病状が悪化し「責付出所」（そのまま病死するものと扱わ

れた）した。自宅軟禁のもと官憲の監視の目を掠めて『日本労働組合評議会史』を執筆、その後、小説を書いてゆく。労働運動家のあと、谷口善太郎は作家の道を進むことになったのである。

4、谷口善太郎の詳細な執筆年表は、娘婿だった加藤則夫（故人）が作成した「谷口善太郎年譜」（『論究日本文学』第四〇号、一九七七年五月。「旧加藤年譜」と略す。）が最初である。加藤の没後、遺族の手により、加藤則夫著『たにぜん（谷口善太郎）の文学』（ウインかもがわ）が出され、訂正・増補された「谷口善太郎年譜」が収録されている。以下、「加藤年譜」と略す。

5、「旧加藤年譜」は作品の発表年月日については現物を確認していないものが多く、間違いが目立つ。『戦旗』『ナツプ』『文学評論』がようやく復刻された時期であり、資料の閲覧に多くの制約があったからである。「加藤年譜」でも間違いは少なくない。

6、「加藤年譜」で多くの行数を割いている伝記的事項と政治家としての業績にはわざと触れず、執筆したものの、出版されたものを集中して取り上げた。

譜」〔加藤年譜〕をもとに伊藤哲英が補遺・修正をした。〕

凡例

1、「加藤年譜」からの引用と「加藤年譜」掲載作品は “ ” で記した。伝記的事項は「加藤年譜」に依拠した。作品の発表年月については、日付の記入は編者が行った。「加藤年譜」は年月までである。「加藤年譜」の間違いについては、紙面の関係上いちいち注記はしていない。

2、「加藤年譜」に掲載されていないものは□枠で記した。

3、(編者注) で諸点に言及した。特記すべき間違いは(編者注)で言及した。

4、(短歌) (俳句) (論説) (小説) (随筆) (ルポルタージュ) (アンケート回答) (挨拶文) (談話) は編者によるジャンル分けである。小説が随筆か区分が難しい作品もある。ジャンル分けのあとに発表紙誌名を記した。

学生の際に、「旧加藤年譜」と出会って以来、気がつけば四〇年に及んだ編者の調査報告を見ていただければありがたい。

一九一四年(大正三年) 十五歳

”三月、石川県能美郡国府村の和気小学校高等科を卒業。”

7、谷口善太郎の「年譜」は以下のものが参考に値する。

①一九五四年十二月二十五日、三一書房(京都市左京区)刊の『日本プロレタリア文学長篇小説集(5) 加賀耿二 清水焼風景』所収の「加賀耿二年譜」(編者注・自筆と思われる。以下、「自筆年譜」と略す。)

②一九五七年五月五日、筑摩書房刊の『現代日本文学全集86 昭和小説集(二)』所収の「須井一年譜」(編者注・これも自筆と思われる。)

③一九七七年五月三十日、『論究日本文学』第四〇号(立命館大学日本文学会発行)掲載の加藤則夫作成の「谷口善太郎年譜」

④一九八二年八月十五日、「政治と文学の会」発行の雑誌『政治と文学』第三号掲載の草野信男「須井一「綿」について 附一 谷口善太郎著作目録・略年譜」所収の草野信男編「谷口善太郎著作目録・略年譜」

⑤一九九六年三月一日、石川近代文学館発行の『石川近代文学全集4 深田久弥 光声光子 島田清次郎 加賀耿二』所収の小林輝治編「加賀耿二(本名・谷口善太郎)年譜」(以下、「小林年譜」と略す。)

⑥二〇一二年四月十五日、ウインかもがわ刊の加藤則夫著『たにぜん(谷口善太郎)の文学』所収の「谷口善太郎年譜」(上)(下)〔加藤年譜〕

⑦二〇一四年一月二十日、新日本出版社刊の『谷善と呼ばれた人―労働運動家・文学者・政治家として』所収の「谷口善太郎年譜」

九月五日、実業之日本社刊の『日本少年』九卷十一号秋季増刊・投書欄の課題「作文 我が父 我が母」の「掲載外佳作」に「石川 谷口善太郎」と記される。

一九一五年（大正四年） 十六歳

教師・渡部知重の主張する現代短歌の影響を受け、啄木の「一握の砂」「悲しき玩具」を暗唱するほど心酔するとともに、『日本少年』に短歌を投書し懸賞をねらったりした。また、『新愛知』の北陸版『北陸日報』にも投書した。”

（編者注）

『日本少年』への投稿は「加藤年譜」記載年よりも一年早く行われていた。

一九一四年九月の「賞外佳作」欄には、「大阪市東区道修町二丁目 八住利雄（十三）」（後のロシア文学翻訳者・映画脚本家）の「わが父」が全文掲載されている。

大正四年には、「徳島県板野郡鳴門村高島 伊藤好一（十五）」が「秀逸」で三度入選して当選文が掲載されている。「十卷三号（三月一日発行） 暖かき日の徳島公園」、「十卷七号（六月一日発行） 太田道灌」、「十卷八号（七月一日発行） 車窓スケッチ」の三点である。「伊藤好一」は正確には「伊藤好市」で、谷口善太郎を作家の道に導いたプロレタリア文学者である貴司山治（谷口善太郎と同年の生まれ）の本名。

十一卷一号（大正五年一月一日発行）には第一部入賞に「大宅壮一」の「万歳!」、「選外佳作」に「大分 後藤壽夫」が出てくる。作家須井一を励ました林房雄の本名である。須井一を生み出し、励ました重要人物の三人がほぼ同時期『日本少年』に投書（入選者には「七宝入銀製メタル」が貰えた）していたのである。

なお、『新愛知』の北陸版『北陸日報』については存在を確認できなかった。

一九一七年（大正六年） 十八歳

六月、母・ふさが他界。投書を通して渡辺順三、土岐哀果、さらには西村陽吉、西出朝風、青山霞村らを知った。以後、青山霞村主宰の『からすき』（犁社・京都深草）同人たちとの交わりを深め、現代口語歌を数多く詠む。”

一九一九年（大正八年） 二十歳

青山霞村らの選で歌集『平地木』を自費出版（未見）、雅号・谷口夢草。”

九月五日、『からすき』第四号が発行されたが、谷口善太郎の短歌は収録されていない。また、『平地木』についての紹介なども見当たらない。

一九二〇年（大正九年） 二十一歳

三月三日、「亡母を想ふ」十四首（谷口夢草）を『からすき』第七号に。

五月十日、「深谷鉦泉で」二十八首（谷口夢草）、「短歌の形式と露台派の謬妄 此一文を虫明甲太郎氏に呈します」（論説・谷口夢草）を『からすき』第八号に。

十月二十五日、『第一の群』第二号の「新進歌人の批評」欄に取り上げられる。（编者注・引用文中の／は改行を表す。）

■「からすき」の驍将谷口夢草君の「若いなやみ」三十三首いづれも素敵素敵と声が高い。／S——何となくしんみりさせられました。／F——感激を強ひられました。／今月見た雑誌の中でまづ一番いい歌と思ふ。／T——いちじるしく進歩した事に敬服する。／K——あまり感傷に走りすぎてゐる。『第一の群』第二号は、十八頁・二十銭・「金沢純正詩社」（金沢市石坂角場十四番地。編輯兼発行人の福田義正の自宅）発行。十一月十五日、「貧苦」十二首（谷口夢草）を『第一の群』第三号（十七頁・二十銭）に。

参銭の切手買はれぬ俺にして貧苦は可笑しいものとなるのか。

故郷に父と姉は苦しんで、俺は異郷に苦しんでゐる。

一九二二年（大正十年） 二十二歳

一月一日、「■消息 谷口夢草君より」を『第一の群』第四号（三十四頁・三十銭）に。「私の住所は東京市外大崎戸越三五五です。」と伝えている。現在の品川区戸越一丁目あたりと思われる。

一月五日、「十月」（ジャンル不詳・谷口夢草）を『からすき』第十一号（未見）に。

二月、『からすき』東京支社歌会に出席。（中略）「狂ほしい静かさ」十三首を『第一の群』（未見）に。

三月、父・八右衛門病死。

四月、「病魔」二十七首を『からすき』第十三号（未見）に。

六月、二首を『からすき』（未見）に。

十一月十日、「愛の目覚め 百首の内」（二十八首・谷口夢草）を『からすき』第十六号に。

（编者注）

『第一の群』については、『口語歌人西出朝風』（二〇〇七年十月三十日、短歌研究社刊）の著者敷田千枝子さまのご提供による。お名前を記して感謝の意を表します。

『からすき』第十一号については、『短歌雑誌』（編輯所・発行所 短歌雑誌社、発売所・東雲堂書店）第四卷第一号（大正十年一月一日発行）掲載の『からすき』第十一号の広告による。「隔月一回五日発行」「定価十五銭」「社友募集 普通二十五銭 現代

口語歌一人二十首迄」とある。

『短歌雑誌』第四卷第二号（大正十年二月一日発行）の「全国短歌会」欄に、「からすき東京支社歌会詠草（麹町区一上田町三二和田方）の六人七首が掲載されている。

まばらまばら松は背高く生えてゐる秋の芝山見ればうれしく

谷口夢草

『短歌雑誌』該当号は二月発行なので、「からすき東京支社歌会」は一月以前となる。

一九二二年（大正十一年）二十三歳

二月、「心さびしく」十三首と随筆「千代女の話」を『からすき』第十七号（未見）に。

三月、「金石小景」五首を『からすき』（未見）に。

この頃、立命館入学のために用意していた二百円が、貯金先の協和銀行（石川）破産のため清算委員会にかかってふいになり、「世界を焼いてしまいたい」衝動にかられた。だが、絶望のなかで、こういう場合に何らの救済もない法規を知り、はじめて社会の矛盾を感じた。

五月、清水焼労働者の間にストライキが起き、集会で奥村甚之助の演説に接し、貧餓ひんがただった幼少年期を思い、その原因が謎を解くように判明した。率先して日本労働総同盟京都連合会に加入。

谷口善太郎・執筆年表（著作目録）上

国領五一郎を知る。ただちに京都陶磁器従業員組合を結成し、青年部長、続いて京都合同労働組合を創立し組合長となる。

六月、日本共産党創立のための京都会議で、オルグにきた荒畑寒村を知る。

七月、日本共産党創立。こうして善太郎は党創立に関係し入党した。推薦者は辻井民之助と国領五一郎である。〃

十一月十日、『現代口語歌選』（選者・青山霞村・西出朝風・西村陽吉）が東雲堂書店から刊行される。「姉その他」（二十四首、短歌・谷口善太郎）が青山霞村の選で収録。

（編者注）

若い時代の谷口善太郎の短歌活動を明らかにしたのは加藤則夫の業績である。残念ながら、自費出版された歌集『平地木』は谷口家の手元にもなく現在まで確認できていない。

加藤は谷口家において、ノートにまとめられた歌集『十月以後・愛と愛集』を発見紹介している。一九二〇年（大正九年）十月までの一〇七首を収録しているという。大正九年十月から翌年の二月までの約五ヵ月間、彼はつねに病床にあつた、歌集『十月以後・愛と愛集』はその間に詠まれたものを集めた、『からすき』『第一の群』に発表した作品の約七割が記載されているとのこと。

編者が入手した『からすき』第十六号の表紙のタイトルは「からすき」、見返しは「犁」、編輯兼発行人は「京都府紀伊郡深草村直違橋一丁目四百七十一番地 青山嘉二郎」、発行所の「か

らすき社」も同じ住所。「青山嘉二郎」は霞村の本名である。第十六号は四二頁、定価廿五銭。「口語で詩歌を作る団体」である「からすき社清規」によれば、「普通社友」の「社費」は毎月三十銭。

これも加藤が紹介していない谷口善太郎の短歌を「愛の目覚め百首の内」から引用する。

深草は静かなとこと聞いてたがほんとだなアと思ひつつ行く。

石段を下りつつもふつと我胸にためらう心おきてたたずむ。

(霞村先生訪問)

あきらめて来は来たものの我家の土蔵が見えりや胸さわぎする。(家に着く)

第一に中の様子をうかごうた玄関前の桃の木の下。

『お父さま』とよばば目をあげ又閉ちて『待つて居たよ』とすぐに泣かれる。

死なしたく無い死なしたくないと泣く姉をなぐさめながら私も泣てる。

もう死ぬと知られた故かかすかにかすかに何か云はれる、お、父上よ。

お前が泣いてちや困るぢやないかと云ふけれど泣かんと居れぬ、今日が別れば。(葬儀)

編者はご遺族に資料の閲覧を申し込んだが、ご遺族も資料の所在を御存知なく今のところ手掛かりがない。拙稿が契機となつて、谷口善太郎の貴重な資料が再び陽の目を見るように祈るばかりである。

『現代口語歌選』は、縦十六センチ・横十一センチ(現代の新書版より縦が一センチ短い)、布装・函入・三三四頁・一円八十銭、「歌数一三〇五首、作者二〇七人」の選集である。同じ「第一部 青銭」(青山霞村選)の中に、谷口善太郎の教師であった渡部知重の「悲しい生活者」(九首)も収録されている。谷口善太郎の短歌との比較のため、その九首を書き写しておく。

世の中のあらゆるものがわが前に不平不満のころも着てたつしよぼしよぼと警察署の門を出る若い女もあつた秋の日
米の値が下つたといふ新聞の相場の欄をこゑあげて読む
満員の電車のなかでわが指をにぎつてをつたみしらぬ女
あた、かいマントも買えずまたいち年我慢するかと欠伸して
みる

「本ばかりたまに羽織の一枚も買へよ」といつた父のあごびげ

今月から貯金しやうとおもつては自分で笑ひまた本を買ふ
なにもかも総てがこれだかういつて指で輪をかき笑つてる人
青物屋の前を通れば玉葱のつよいかゞした日曜のあさ

加藤が引用していない谷口善太郎の短歌を『現代口語歌選』から書き写しておく。

何かにつけて食つてかゝる我姉のつめたい心さみしいこゝろ
善光寺亡き母上をおもひだす母一生のあくがれの土地
久しぶりに逢つた恋しい人だのうちにうちとけられぬ悲しさはこ
れ

老いた姉病身の父これだけに泣く俺だから秋が身にしむ
金沢のしりたれ坂のたちん坊をみれば昔の友Kである
彼はいふ時計がほしいと俺はいふ本がほしいと神保町でお
る

なお、「明治新聞雑誌文庫」には『からすき』第四号、第七号、第八号が所蔵されており、マイクロフィルムで閲覧できた。特筆すべきは第八号（全三十二頁）である。大正九年二月四日からわずかな休暇を利用して、「日頃の狂的煩悶」を静養しようとする山間の深谷温泉（現在は金沢市）に宿泊した時の詠草（十から十一頁）である。

人が云ふ深谷鉱泉の静かさに俺の心は澄まないよ君
だらしなないみだらな唄だ隣室で唄ふ仲居のうた聞き人れば
酌に來た十四五才の小娘の仲居相手に話す夜の九時
人世の、あ、あ、これがどんぞこか、十五の仲居の肉を売る

と云ふ

十五の仲居の話に興が乗り酒を過したみじめな俺だ
赤土の崖を抱いて曲がる道、暁霜はまだとけもせず

同号十六頁から十九頁に掲載された「短歌の形式と露台派の謬妄」（論説）は、リズムのない短歌を「自由歌運動の基底」だとする「虫明氏始め露台社の人々」に対する反論文。五七反復の韻律は「国民内的要求による国詩のリズム」であつて、発展性のない不定律歌を手本として、音韻歌の存在に一考も与えないのは謬妄である。韻律歌に託して「個性の発露、生活の叫びを表現してゐる」のが私たちだと主張している。ともすれば感情過多になりがちな短歌と比較して、この論説は、論説としての骨格と構成、緻密な展開を持つている。後年の『日本労働組合評議会史』に結実する論説力がここでは既に発揮されている。

一九二三年（大正十二年）二十四歳

一月、鞍馬口大宮西入ル下ルの辻井民之助宅で開かれた日本共産党京都支部創立総会に出席。（中略）闘争・検束・失職・闘争のくりかえしや、地下での連日連夜の活動生活であつたが、善太郎にとつては初めて体験する充実感あふれる生き甲斐のある年であつた。国領五一郎との党活動を通して強い影響を受け、大きく思想転換をした。しだいに『からすき』同人たちなどの文学仲間ともはなれていった。”

四月一日、「反動運動に対する所信」(アンケート回答・谷口善太郎)を『進め』に。

一九二四年(大正十三年) 二十五歳

「一月一日、「潜入と蠶食」(社会民主、義的政治運動)に対して共産主義者は何を為すべきか。」欄、論説・谷口善太郎)を『進め』に。

四月一日、「大会に出席して」(論説・谷口善太郎)を『潮流』創刊号に。

七月一日、「政党組織に依つて」(「労働組合と大衆」欄、「課題 労働組合は如何にすれば一般大衆と結合し得る乎」論説・谷口善太郎)を『潮流』第一巻第四号に。

九月一八日、「政党問題私見断片」(論説・谷口善太郎)を『労働者新聞』に。

「三月、山本宣治とともに京都労働学校を創設。四月、過労と栄養不足で肺病に倒れた。徳田球一の紹介で三宅島の浅沼稻次郎生家へ転地し、約半年間滞在した。その間、「資本論」第一巻を徹底的に学習。十月、京都へ帰り労働学校の主事兼講師となった。」(編者注)

『潮流』は潮流社(大阪府泉北郡高石町羽衣八二四ノ五)発行の「社会評論雑誌」。浦西和彦編『日本プロレタリア文学史年表

事典』(二〇一六年、日外アソシエーツ刊)の記載によって初めて紹介された。

「大会に出席して」は「日本労働総同盟第十三年大会に列席して感じた事」を記している。「政党組織に依つて」の文末に「(六、五、病床にて)」とある。

『労働者新聞』は日本労働総同盟機関紙(関西版)とある。

一九二五年(大正十四年) 二十六歳

「二月、「労働学校の運動」を『郷土文芸』に須井呈の筆名で発表(未見)。

五月、日本労働総同盟は左右の対立で分裂。日本労働組合評議会の中央常任委員兼京都地方評議会主事となる。」

六月五日、「無産階級と産児調節」(論説・谷口善太郎)を『産児調節評論』(山本宣治主幹)第五号に。

七月三日、「移民政策の『観念的遊戯』—産児調節の目的範囲」(論説・谷口善太郎)を『産児調節評論』第六号に。

一九二六年(大正十五年) 二十七歳

京都府の『大正十五年十月 池田前知事 濱田知事 事務引継演説書 特別高等警察課』の冒頭に二十五人の「特別要視察人概況」が記されている。「無職 辻井民之助」「職工 奥村甚之助」とともに「無職 谷口善太郎」の名前がある(廣畑研二編・解説

『編集復刻版 戦前期警察関係資料集』第四卷『知事事務引継書』、二〇〇六年十月十日、不二出版刊、四頁。「昭和二年七月」にも同様の記述がある（同書、九十六頁）。

一九二七年（昭和二年）二十八歳

「一月一日、『評議会の人々』（『解放運動界の巨星新星』欄。論説・谷口善太郎）を『解放』第六卷第一号に。九月、長男・一雄誕生。」

六月十三日、「台銀『整理』問題を曝く」（論説・山下三郎）を『政治批判』第五号に。

十月一日、「東京市電自治会 現実同盟の組織と『大衆』理論家」（論説・山下三郎）を『労働者』第二卷第十号に。

（編者注）

「山下三郎」の筆名については、「主として階級運動関係の雑誌へ政治的な論文を書いたのだが、バレることをおそれてそれには一篇々々署名をかえた。山下三郎だとか、磯村秀次だとか村田信三だとか、多分そのころのペンネームを勘定したら十六七はあろうかと思う。」（一九四八年刊『清水焼風景』の「あとがき」による）。

一九二八年（昭和三年）二十九歳

「一月一日、『無条件合同論』の破産」（論説・谷口善太郎）を

『解放』第七卷第一号に。

二月、普通選挙法による第一回総選挙に山本宣治を説得して立候補させ、京都二区で当選。善太郎は病気が再発して貧窮の底に寝ていたが、河上肇らと応援演説や論文代筆をして運動した。

三月、いわゆる三・一五事件で逮捕された。

四月、起訴される。未決中に獄中で二回目の大咯血をし、十月予審決定頃には脚気も加わって危篤状態になったため、十一月に人事不省のまま京都刑務所から担架でかつぎだされた。但し「貴付出所」で、「一、居室に監視の刑事をつける。二、外出、面会執筆の禁止。これを破ると再逮捕する。」という条件がついていた。公判は共同被告から分離された。以来五年間余り、特高に見張られながら自宅監禁のまま病臥。訪れる者は、医師の安田徳太郎と親戚の者のみ。」

『インタナショナル』第二卷第二号（昭和三年二月十六日発行）から第二卷第五号（同年六月十日発行）までの奥付は、「発行編輯兼印刷人 谷口善太郎」になっている。『インタナショナル』の「編輯所」は産業労働調査所である。

一九二九年（昭和四年）三十歳

「三月五日、治安維持法の死刑法への改悪に反対した山本宣治が右翼の暴徒に殺された。善太郎は、自分が脳天を刺されたような激しい衝撃を受け三回目の大咯血をした。」

四月、瀕死の病床で山本宣治を記念するために『日本労働組合評議会史』を執筆することを決意し、妻・そとの口述筆記で毎深夜奮起した（翌年五月に完成）。

九月（八月廿九日発行）、「階級戦士としての同志山本宣治」（論説）を小岩井浄の名で河上肇編輯『社会問題研究』第九十六冊に。

十月十五日、「労働組合が『プロレタリアート党支持』といふスローガンを掲げることの誤謬について」（論説・深川一郎）を『社会問題研究』第九十七冊に。

十二月二十日、「右翼や中間派組合の争議をどうして応援するか」（論説・深川一郎）を『社会問題研究』第九十九冊に。

一九三〇年（昭和五年） 三十一歳

二月、三・一五事件の判決があり同志たちは下獄したが、病気のため分離されていた善太郎は一人取り残された。

二月一日、「家賃闘争と労働組合（つげたり、家賃闘争に於ける労働党の活動）」（論説・二宮武夫）を『社会問題研究』第百冊に。

二月一日、「日本労働組合評議会史」（序言・緒論・第一章）第二章（論説・磯村秀次）を『社会問題研究』第百冊に。

四月一日、「メーデー闘争の準備について」（論説・村田信造）を『社会問題研究』第百一冊（発売禁止）に。

四月一日、「日本労働組合評議会史」（序言（再録）第三章）第

四章四）（論説・磯村秀次）を『社会問題研究』第百一冊（発売禁止）に。

五月一日、「日本労働組合評議会史」（第四章五）八）（論説・磯村秀次）を『社会問題研究』第百二冊に。

六月十日、「ピラによる工場獲得の手段」（論説・村田信造）を『社会問題研究』第百三冊に。

六月十日、「日本労働組合評議会史」（第五章一）三）（論説・磯村秀次）を『社会問題研究』第百三冊に。

七月一日、「日本労働組合評議会史」（第五章四）七）（論説・磯村秀次）を『社会問題研究』第百四冊に。

八月一日、「日本労働組合評議会史」（第六章一）三）（論説・磯村秀次）を『社会問題研究』第百五冊に。

（編者注）

『社会問題研究』第百二冊（五月）の「編輯後記」（立）は、

「メーデー闘争の準備について」は、全く時事に適切な具體的内容を盛った有益な論文であつたが、しかしそれと同時にそれが発売禁止を招く主な原因となつた。

と記している。「編輯後記」（立）は続けて、

『労働組合評議会史』が、前号の発売禁止のために（その二）が欠けることになつたのは、編輯同人の深く遺憾とする

ところである。今回は一応その再録を見合せ、本号には(その三)を載せたが、もし多数の読者からの要求があれば、追て(その二)の部分を抜刷してもよいと考えてゐる。

と記している。

『社会問題研究』第百四冊(七月)の「読者から」欄に「一読者」の意見が寄せられている。

○六月号の内容は宜しい。「評議会史」は実に堂々たるものだ。それを通じて評議会史のみならず其の時々の一般的情勢をも知り得る。又たえず自己批判を以て論を進めてゐるのは宜しい。

『社会問題研究』第百五冊(八月)の「編輯後記」に「日本労働組合評議会史」はずつと後の方まで原稿が来てゐる。これは大概毎号欠かさず、連載するつもりだ。」とある。しかし、連載はこの号で終わった。

『社会問題研究』第百六冊(十月)の「編輯後記」には、「連載中の『日本労働組合評議会史』および『プロレタリア経済学』の双方とも、原稿は手許に出来てゐるのだが、他の原稿とともにそれらはみな次号に譲つた。」とある。

谷口善太郎「後援会部内資料」として一九七二年十月二十五日に出されたパンフレット『たにぜん』の裏表紙に「谷口善太郎

著作」のリストがカラー写真入りで掲載されている。そこに「メーデーの話(共生閣)」と他では言及されたことのない書名が書かれてあつた。写真とリストはそのまま加藤の『たにぜん』の文学』に収録されている。該当の書は左記のものではないだろうか。

谷村啓雄著　メーデーの話

昭和五年四月五日、共生閣刊。(四六判・紙装・九十一頁・三十銭・装幀柳瀬正夢)

発行兼印刷者…田村敬男(京都市上京区河原町通丸太町上ル)

目次…序(著者)／メーデー歌／一、メーデーは国際的労働者の闘争日である／二、メーデーの歴史／三、日本のメーデーの歴史／四、メーデーの闘争方法について／五、メーデーと労働組合総連合の問題(或る労働者への手紙)／六、メーデーと労働者農民同盟の問題／七、各国に於けるメーデーの光景(一)シカゴの悲劇(二)巴里のメーデー(三)ベルリンの市街戦(四)××者ロシア労働階級のメーデー／八、結び

四月一日の「メーデー闘争の準備について」(論説・村田信造)を掲載した『社会問題研究』第百一冊が発売禁止になつたので書物として出版した可能性がある。書かれているのがメーデーにつ

いての一般的な内容なので、両者を比較して同一人物が書いた決定的な証拠を見つけることが出来ていない。現段階では紹介に留めておく。

一九三一年（昭和六年） 三十二歳

二月、友人であった旧評議会委員長の野田律太が、プロレタリア作家同盟の幹部である貴司山治を東京から案内して突然来訪。小説を書けと勧められた。文学運動の役割、労働者作家の生まれなければならぬ必然性を説き、作品を書いて運動に参加せよというのであった。（中略）当時、「日本労働組合評議会史」を単行本にする話があり、毎月三十円の印税が一年くらいはいる予定になっていたので、その間に作家修業することを決意した。これが生涯の一つの転機となった。

七月一日、「特別読物 三・一五事件挿話」（小説・須井一）を『戦旗』六・七月合併号に。

八月八日、「綿」（小説・須井一）を『ナツプ』（挿絵室順治）に。

九月五日、「綿」（二）（小説・須井一）を『ナツプ』（挿絵岩松淳）に。

十二月二十五日、「元日」（小説・須井一）を『文学新聞』第五号に。

一九三二年（昭和七年） 三十三歳

二月十日、磯村秀次著『日本労働組合評議会史』（第一分冊）（四六判・紙装・二六〇頁・八〇銭）を京都共生閣（京都市上京区河原町通丸太町上ル）から千五百部刊行。

三月二十五日、「綿」を巻頭に収録した『年刊日本プロレタリア創作集 一九三二年版』（改訂版）が日本プロレタリア作家同盟出版部から刊行された。同年五月三日安寧禁止処分を受ける。「綿」の本文は初出による。

四月三十日、磯村秀次著『日本労働組合評議会史』（第二分冊）（四六判・紙装・三三六頁・一円）を京都共生閣から刊行。

六月一日、「踊る」（小説・須井一）を『プロレタリア文学』に。

七月十日、須井一著『綿』（日本プロレタリア作家同盟叢書第一篇）（四六判・紙装・五六頁・十銭）を日本プロレタリア作家同盟出版部から刊行。「綿」に就いて（日本プロレタリア作家同盟／綿、を収録。「綿」の本文は初出による。

この頃から、貴司山治や大宅壮一らの手で『改造』や『中央論』に原稿を持ち込む準備がされ、注文も来るようになった。しかし、一般雑誌に発表するならば「須井一」の身元や住居を明らかにする必要があり、同時にそれは、責付出所の執筆禁止条項に触れ、再取監を意味していた。安田徳太郎に代って診療してくれ

ていた高橋松蔵と太田武夫が一策を案じ、組合運動をして解雇になった元小学校教師・安達精二を表面上の「須井一」に仕立てた。官憲の目をくらし、安達精二をかばう意味を考えて教員の話を書く。

九月三十日、「自己批判」（論説・須井一）を『読売新聞』（一枚評論）欄に。

十月一日、「幼き合唱」（小説・須井一）を『中央公論』に。

十月一日、「樹のない村」（小説・須井一）を『改造』に。

十月七日、「井魚君の心配」（論説・須井一）を『読売新聞』（一枚評論）欄に。

十一月十三日、「高らかに歌ふ」（上）（随筆・須井一）を『読売新聞』（「新人紹介」の「文壇、その後に来るもの」欄）に。
十一月十五日、「高らかに歌ふ」（下）（随筆・須井一）を『読売新聞』（「新人紹介」の「文壇、その後に来るもの」欄）に。

十一月二十七日、『清水焼風景』（四六判・紙装・四六二頁・一円二十銭）を改造社から刊行。読者諸氏へ／綿／踊る／幼き合唱／樹のない村／清水焼風景、を収録。全文総ルビ。同年十一月二十五日「共産党全協支持宣伝」の理由により安寧禁止処分。

十二月十六日、『清水焼風景 改訂版』（四六判・紙装・四五六頁・一円二十銭・装幀岩松淳）を改造社から刊行。読者諸氏へ／綿／踊る／幼き合唱／樹のない村／清水焼風景、を収録。全文総ルビ。「清水焼風景」の途中、四四四頁に（以下二行と六頁削除）

とある。

（編者注）

当時の「発売禁止」（発禁）は、大別して、安寧禁止処分と風俗壊乱処分の二種類があった。

『日本労働組合評議会史』第一分冊は、『昭和 書籍 雑誌 新聞 発禁年表』上巻（一九六五年、明治文献）によれば、「石川県より申報」共産主義示唆煽動」で昭和十年七月二日安寧禁止処分を受けている。「加藤年譜」のいう「直ちに発売禁止」となったわけではない。『日本労働組合評議会史』第二分冊は、前掲書によれば、「階級斗争示唆」で昭和七年十二月七日安寧禁止処分を受けている。同じく「直ちに発売禁止」となったわけではない。なお、「ただちに発売禁止の厄にあった」とは、一九四七年刊の高桐書院版の「第二版への序」（著者）による。

（第二分冊）の「序」（著者）に「第三分冊（評議会の代表的資料集）は、引きつゞき刊行されるであらう。」と記されている。当初は全三冊の構想であった。第三分冊は未刊である。

『清水焼風景』（十一月、十二月）所収の「綿」は末尾に（一九三二年四月作）と記されている。また、「綿」本文は初出のラスト三行（左記）を削除している。

私は思はず母の肩を強くかゝえた。／（以下削除）スクリーンにうつ、たあの美しい綿の木が私の眼にしみついてゐた。私は子供の時の綿の木を思った。母も綿の木をみて今、

綿の木を思つてゐるに違ひない。

『読売新聞』昭和七年九月三十日付に掲載された須井一「自己批判」は自作の「樹のない村」の「農民の借金問題」を「今日の政治的経済的情勢の諸特徴から切りはなして考へてゐた」「私の間違ひ」を自己批判したのだが、同紙の「一枚評論」欄で論争を巻き起こした。十月二日付で井魚散人が「須井君今一步」と皮肉る。十月四日付では犬田卯「樹のない村」に連関して「マルクス派的観点に立つ農民作家の最悪なる欠点」に言及する。十月七日付で須井一「井魚君の心配」で「秋風と一緒に埃も立つ」と応酬。十月九日付井魚散人「須井君落第！」で「矢張り蛙の子は蛙か」と落胆する。十月十二日付では「一労働者」が「労働者から須井君へ」と脇から参入して須井を批判する、と続いたのである。新進作家として須井一が認められたからこそ起こつた論争（というより非難の応酬）であつた。

「幼き合唱」掲載の『中央公論』「編輯後記」には、「また「幼き合唱」は新人須井一氏の努力になれるもの。」と記されている。『読売新聞』一九三二年（昭和七年）十月七日付四面「よみうり抄」欄に、「▲須井一氏 同氏の処女作「綿」はベルリン革命作家同盟から独訳刊行されること、なつた。」と紹介されている。「自筆年譜」の「一九三三年」には以下の様に書かれている。二月、ベルリン・プロレタリア作家同盟より来信、『綿』の独訳について承諾を求めて来る。（これは訳文ができ、ウイットフォ

ーゲルの校閲まですんだが、二月二十七日のドイツ国会放火事件およびつづいてヒットラーの政權掌握のため出版までいたらなかつたらしい。」「ウイットフォオーゲル」とは、「プロレタリア革命作家同盟」に所属したカール・ウイットフォオーゲルのことと思われる。

『プロレタリア文学』第一巻第八号、一九三二年臨時増刊（六月二十日発行）の裏表紙に「日本プロレタリア作家同盟叢書」の広告が掲載されている。当時の読み方の公式が表れているので左記に引用する。

第一篇 綿 須井一著 一九三一年度における最大の収穫。

谷本清が創作方法の問題の解決に当つて正當に評価し、その文学的地位を明らかにした作品。巻頭に同盟の責任ある批判を附して新たに出版する。

第二篇 沼尻村 小林多喜二著 小林の最近の力作である。

農民文学の問題がやうやく具体化しようとする時『沼尻村』は、そのためのよき基礎となるであらう。『綿』と共に読まれるべきものである。

一九三三年（昭和八年） 三十四歳

二月一日、「行方」（小説・須井一）を『近代』第二巻第二号に。

一月一日、「労働者・源三」（小説・須井一）を『改造』に。

一月一日、「恐慌以後」（小説・須井一）を『プロレタリア文

学』に。

一月六日、「庄五郎おやぢ」(一)〈小説・須井一〉を『都新聞』
「新人小品集(3)」欄に。

一月七日、「庄五郎おやぢ」(二)を『都新聞』「新人小品集
(4)」欄に。

一月十六日、「銃殺 支那の話」(小説・須井一)を『帝国大学
新聞』に。

一月十四日、「大衆文学の批評活動」(隨筆・須井一)を『読売
新聞』(扉を開く)欄に。

一月、「バットの箱」(小説)『京都日出新聞』に。「つりのでき
ぬ釣師」に収録され、初出は『京都日出新聞』一月と記されてい
るが、『京都日出新聞』『京都日日新聞』とも見当たらなかった。

二月一日、「恐慌以後(二)」(小説・須井一)を『プロレタリ
ア文学』に。“

三月一日、「銃殺を見る」支那の話」(小説・須井一)を『朝
鮮公論』第二卷第三号に、「銃殺 支那の話」(二月十六日)
を改題して再録。

四月一日、「自己を語る」私の「若さ」と「素人」(隨筆
・須井一)を『人物評論』に。

“四月一日、「城砦」(労働者・源三)第二部」(小説・須井一)
を『改造』に。

四月一日、「熊」(小説・須井一)を『文芸春秋』に。

四月一三日、「鉄」(小説・須井一)を『大衆の友』に。掲載誌
は四月一三日、「共産主義革命煽動」の理由で安寧禁止処分を受
ける。

五月一日、「文芸時評 四月のプロレタリア文学」(須井一)を
『改造』に。“

五月一日、「恐慌以後」(二月十九日 須井一)のお知らせ文
を『プロレタリア文学』に。

“五月二十一日、「行軍」(小説・須井一)を『京都帝国大学新
聞』に。

七月五日、「歌ごゑ」(戯曲・須井一)を『経済評論』第八卷第
八号夏季増刊号「新作三十三人集」に。“

八月四日、須井一著『人絹工場』(小説・真理の友叢書第二
輯・刊記記載なし・小四六判・紙装・五四頁・二銭・ガリ版刷
り・真理の友社(住所記載なし)刊)が安寧禁止処分となる。
(編者注・内容は、末尾に、「須井一 労働者・源三より」とあ
るが、原文をかなり自由に書き換えている。)

“九月一日、「船の中で」(小説・須井一)を『文化集団』に。
九月一日、「逃げる」(小説・須井一)を『改造』に。

十月十三日、須井一著『源三』(四六判・紙装・四八八頁・一
円五十銭)を改造社から刊行。巻頭に(須井一)／逃げる／船の
中で／源三(第二部・第三部)／道を求めて／熊／小品四篇(行

方／庄五郎おやち／銃殺（支那の話／行軍）を収録。”

（編者注）「道を求めて」は「プロレタリア文学」に連載した未定の作「恐慌以後」の改作改題である（巻頭に）とある。

十一月一日、「現代における文芸上の我立場・主張」（アンケート回答・須井一）を『文芸』創刊号に。

（編者注）

「庄五郎おやち」（二）が掲載された一月六日付『都新聞』に「写真は須井一氏」と丸縁眼鏡をかけた写真が載っている。谷口善太郎と明らかに別人物なので「須井一」を演じた「A君」＝「安達精二」であろう。

単行本『源三』は、『昭和 書籍・雑誌・新聞発禁年表』上巻（一九六五年、明治文獻刊）によれば、昭和八年九月十五日安寧禁止で「九一四九頁削除」処分を受けている。

単行本『源三』七十六頁には以下の断りが書かれている。単行本『源三』が第二部から始まる説明である。

お断り—本作の第一部は、その筋の命により、全部これを削除するのやむなきにいたしました。作者としては、これをこのまゝ、発表するに忍びないのですが、乗り出した船で今更出版中止にするわけにも行かず、目をつぶって残りの部分を出すことにしました。全身負傷だらけの源三君の悲壮な姿を、読者よ、愛してやつてくれたまへ。作者 追記

「労働者・源三」（第一部）は、小田切秀雄編『続発禁作品集』（一九五七年七月十五日、北辰堂刊）に収録されたことよって初出以後初めて陽の目を見た。

国会図書館蔵の「日本占領関係資料」の『源三』は九月五日発行、四八一頁。全文ではなく、三三三頁から四八一頁まで閲覧できる。

「歌ごゑ」（戯曲）は、一九七九年三月五日、『山宣研究』第四号（京都・同志社山宣会発行）に再録された。

（二月十九日 須井一）のお知らせ文の内容は左記のとおり。

『恐慌以後』は一九三一年に執筆した未完の作品で、作者として現在すべての点で書き直したいと思つてゐたものです。それがあつた事情のために、作者の意志に反して、書いてゐた分の約半分が本誌一、二月号に掲載されました。しかしどう考へて見てもこれをこのまゝ、発表しつづけることは作者として気が引けますので、今度同盟機関紙部にお願ひして掲載中止にして貰いました。（以下略）

「銃殺を見る」支那の話」を掲載した『朝鮮公論』は朝鮮・京城府長谷川町で発行。「編輯局より」を見ても『帝国大学新聞』から転載された事由は何も記載していない。

一九三四年（昭和九年） 三十五歳

々特高の目をぬすんで泉涌寺御陵あたりまで散歩にでるほど快復した。ときには党との連絡のため大阪などへもでかけた。これを特高に見つかり、公判を受けるか、責付出所を取り消すかと迫られた。十月、筆名を加賀耿二に改め、公然と作家活動を始めた。十月一日、「工場へ―「少年時代」の一」（小説）を『改造』に。

十二月、三・一五事件の公判を受ける。治安維持法違反として懲役三年・執行猶予五年。再び貧窮のどん底におちいる。党との連絡が切れる。

（編者注）

この年から昭和二十年の敗戦まで、発表名はすべて「加賀耿二」である。

「工場へ」掲載『改造』の「編輯だより」には左記の様にある。

○新秋文壇を震撼せしむる巨篇を蒐めた創作欄を諸賢に贈る。加賀耿二君は自信を以て推薦する絶対的新人で、沈滞のプロ文壇に新活力を注入するものだ。電鉄敷設の難工事と闘ふ葉山氏が久し振りに力作を寄せた。「海に生くる人々」に次ぐ快篇だ。（編者注・葉山嘉樹「山谿に生くる人々」生きている為に）

『改造』の編集に携わった水島治男は著書『改造社の時代』戦

前編（一九七六年五月二五日、株式会社図書出版社刊）に左記の回想を書き留めている。

昭和七年、有力な新人があらわれた。須井一である。処女作「棉」をもって登場した。（中略）『改造』では昭和七年十月号に「樹のない村」をもらっている。ところが、同月の『中央公論』にも「幼き合唱」が載っているのである。流行作家が他の有力誌に同時に発表することはあっても、新人が有力誌にかけもち発表することは、きわめてめずらしいことだったのである。（中略）「棉」で一躍有名になつていたので、両誌が取り上げたのは当然だが、偶然の一致とはいえず、『中央公論』にも同時に掲載されたのだからおどろきであり、華々しい登場ぶりであった。そのうえ十二月には大宅壮一塾から、須井一の長編小説「清水焼風景」が持ちこまれ、改造社から発行された。そして、須井は昭和八年一月「労働者・源三」、同年四月「城砦」、さらに九月「逃げる」と、矢つぎばやに『改造』に発表している。

ところがある日、須井一が社に私をたずねてきて、「須井一という筆名は、実在の人物がいて、その名前を借りているのです。この男は私の友人で、いま小学校の先生をしている。それで『中央公論』に発表した『幼き合唱』はわざわざ小学校のことを書いたのですが、このままの筆名で有名になると本人に迷惑をかけることになります。それで、今後『加

賀歌二」という筆名に変更したいのですが、それでも原稿を

とってもらえますか」という相談である。わたしとしては「棉」の作家須井一として原稿をもらい、相当数の作品を須

井一のレットテルで市場に売り出しているのに、肝心の有名性が抹殺されて、あらためて白紙からの出直しとなると、さていかがなものであろうかと、何度も頭をひねった。これは私の一存というわけにはいかない、会議にかけなければならぬ。誌上では須井一と加賀歌二は同じ作者である。須井一同様にご愛読を乞う、というわけにはいかないだろう。会議の上、とにかく作品本位だから、いいものであれば読んでもらえる。また一人新人が現れたということでもいいではないか。あとで須井一が加賀歌二とわかってもらわなくても、ということに決まったのである。

加賀歌二としての再出発は九年十月号「工場へ」である。昭和十三年までに須井一で四回、加賀歌二で四回、都合八回発表している。(一九三〇—一九四頁)

一九三五年(昭和十年) 三十六歳

三月一日、「雪の夜の話(小説)」を『文芸』に。

四月十六日、「広告(小説)」を『京都帝国大学新聞』に。「夕しぐれ」と改題して創作集『工場へ』に収録。

六月一日、「港一瞥(小説)」を『社会評論』(ナウカ社)に。

六月一日、「暁前の死―或る百姓の一生(小説)」を『文芸』

(八月まで三回連載)に。

七月一日、「文学を志す人のために」(アンケート回答)を『文学案内』創刊号に。

八月一日、「プロ作家の見た京都水害報告」(ルポルタージュ)を『労働雑誌』に。

十月一日、「文化擁護国際会議に就ての諸家の感想」(アンケート回答)を『社会評論』に。

十月一日、「兵助の受難」(小説)を『社会評論』に。

十月一日、「血の鶴嘴」(小説)を『文学案内』(翌年三月まで六回連載)に。

十月一日、「私の最も影響された本」(アンケート回答)を『文学案内』に。

十月二十六日、「プロ文学の現状」(論説)を『京都帝国大学新聞』に。

十一月一日、「批判と反批判・一つの弱点」(論説)を『文芸』に。十二月一日、「今年度の作品と新人」(アンケート回答)を『文学評論』に。(编者注・このアンケートの回答内容は、「好きな作家―志賀直哉。有望と思ふ新人―浅井花子。」とある。)

十二月一日、「血の鶴嘴」について(随筆)を『文学案内』「アンテナ」欄に。

月日刊記なし 加賀歌二著『工場へ』(小説叢書7)が「モ

スコ― 外国労働者出版所」から刊行（日本語・一〇四頁）される。「工場へ―少年時代の一―」のみ収録。定価は五〇コペイカ。なお、国会図書館デジタルコレクション版なので判型、装幀は不明。

『世界文化』『土曜日』等の同人たちと接触し、中井正一と辻部政太郎のほかに久野収や能勢克男らを知る。“

（編者注）

十月一日発行の『文学案内』掲載の「リアリズム文学叢書刊行」の広告に左記の様にある。実際に出版されたのは翌年五月であつた。

血の鶴嘴 加賀耿二作 ★第三編

十一月十日発売（編者注・これは横書き）

新人加賀は鬼才といはれる点でかれをメリメに比した人すらある。構成の天才なる点、叙述の筆の雄勁なる点は他に類がない。「血の鶴嘴」はその畢生の傑作である。

一九三六年（昭和十一年） 三十七歳

〃二月一日、「山本宣治氏の思ひ出」（随筆・「階級戦線の上の人々」欄）を『社会評論』に。

二月一日、「銭屋五兵衛実録」（小説）を『水産公論』（十二月まで十一回連載）に。

谷口善太郎・執筆年表（著作目録）上

三月一日、「再生記」（小説）を『改造』に。

三月一日、「お千代」（小説）を『労働雑誌』に。

三月一日、「或る平凡な話」（小説）を『文学評論』に。“

三月一日、「生活と取組んだ詩を」（随筆）を『詩人』（文学案内社）に。

〃三月六日、「コンクール作品を読む」（随筆）を『京都帝国大学新聞』に。

〃四月二十日、「参宮列車で」（小説）を『京都帝国大学新聞』に。

〃五月一日、「作者の感想―或る日の感想」（随筆）を『文芸通信』に。“

五月一日、「メーデー禁止についての感想」（アンケート回答）を『社会評論』に。

五月一日、「労働者の恋愛―随筆風に―」（随筆）を『性科学研究』恋愛特輯号に。

〃五月七日、「監獄部屋について―貴司山治君を駁す―」（論説）を『学生評論』に。“

五月二十日、「暗さと戦ふ 立ち場について」（随筆）を『早稲田大学新聞』に。

〃五月十五日、「血の鶴嘴（加賀耿二創作集Ⅰ）」（四六判・紙装

・カバー・函入・帯・二五二頁・一円二十銭、装幀・小栗美二)を改造社から刊行。血の鶴嘴／お千代／再生記を収録。

七月一日、「素人の経験」労働者作家の小説勉強法」(随筆)を『文学案内』に。

七月一日、「文芸時評」を『社会評論』に。

七月四日、「夏の宵」(小説)を『土曜日』創刊号に。

八月一日、「途上」(小説)を『改造』に。末尾に「長篇「開墾部隊」の首章」とある。

八月一日、「ゴリキイの死に対して日本の勤労作家から贈る言葉―『母』におけるゴリキイの意義」(随筆)を『文学評論』に。

八月一日、「文芸時評」を『社会評論』に。

八月一日、「性教育の経験と希望」(アンケート回答)を『性科学研究』に。

八月十一日、「作者の言葉」(*『血の鶴嘴』について)(随筆)を『読売新聞』に。

九月一日、「荷を挽く馬」(小説)を『学生評論』に。

九月一日、「報告文選評」を『文学案内』に。

十月一日、「少年」(小説)を『文学界』(文芸春秋社)に。

十月一日、「女工スポーツ」(小説)を『日本評論』に。

十月一日、「報告文選評」を『文学案内』に。

十二月一日、「私の息子」(随筆)を『性教育』に。

十二月一日、「小説選評」を『文学案内』に。

十二月一日、「或る羽撃ち」(「私の一頁」欄)(随筆)を『文学案内』に。

十二月一日、「もはや景気なし」を『改造』の「ルポルタージュ 軍需工業地帯 阪神」欄に。

十二月一日、「報告文選評」を『文学案内』に。

十二月十六日、十七日、「パスツールの道」(随筆)を『北国新聞』に。「小林年譜」によって初めて紹介された。

(编者注)

「錢屋五兵衛実録」の各回のタイトルを左記に記す。なお、発行日は各月一日。

海上雲遠し(錢谷五兵衛実録―その一) 二月号

「編輯後記」に「従来の水産公論は堅過ぎるとの批評もありますので、文壇の中堅加賀耿二氏に実録文学の執筆を乞うと同時に多少内容にも変化を出すべく努めました」とある。

商人五兵衛(錢谷五兵衛実録―その二) 三月号

国禁突破(錢谷五兵衛実録―その三) 四月号

密貿易の全貌(錢谷五兵衛実録―その四) 五月号

武士と商人(錢谷五兵衛実録―その五) 六月号

三十万両の餌(錢谷五兵衛実録―その六) 七月号

加賀藩征服(錢谷五兵衛実録―その七) 八月号

湖上風波あり(錢谷五兵衛実録―その八) 九月号

疑獄の真相（銭谷五兵衛実録―その九）十月号

訊問と判決（銭谷五兵衛実録―その十）十一月号

興亡即是人生（銭谷五兵衛実録―完）十二月号

創作集『血の鶴嘴』の白色帯文は左記のとおり。／は改行を表わす。

（背）本年度最高のプロレタリア小説

（表）一・二〇

加賀歌二は労働者作家／中の天分豊かなる第一／人者、文学案内社では彼れの創作集を大体こ／れ位の体裁の本にして／逐次出して行きます

（裏）プロレタリア文学がすつかり四分／五裂になり下火になつたといはれ／る一九三五・六年度において／「文学案内」に連載されて大衆の／血を沸かし／／これこそ堂々たる本格的なプロレタリア文学／／息づくひまもなく読ませる興味百／パアセントの作品／／北海道タコ人夫の惨たる生活を描いて、今や／／本年度プロ文学最高の作品との絶／賛を博しつつある作品！

『文芸年鑑 一九三六年版』（一九三六年三月二十日、第一書房刊）の「文筆家総覧」には次の様にある。

谷口善太郎・執筆年表（著作目録）上

加賀歌二 京都市東山区清閑寺霊山町二二 本名谷口善太郎、明治三二年十月石川県に生る。小学校を経て大正十年労働運動に参加、旧総同盟、旧評議会を経て三・一五事件に連座したるも、最近公判の結果事件は執行猶予、小説「工場へ」「雪の夜の話」又須井一の名で「清水焼風景」その他。

ここではじめて、加賀歌二こと本名谷口善太郎が須井一と同一人物であることが公の場で記された。

十月一日発行の『文学案内』の奥付「編輯室レポ」に、「△今度、江口渙、張赫宙、村山知義、加賀歌二の四氏が文学案内編輯顧問になつてくれた。」とある。

一九三七年（昭和十二年） 三十八歳

二月、「裸になる女」（小説）を『夕刊大阪新聞』（未見）に。

一月一日、「報告文選評」を『文学案内』に。

一月二十日、「或る正月」（小説）を『京都帝国大学新聞』に。

二月一日、「短編 はは」（須井一の『綿』より改作）を『同胞』第二号が掲載した。『同胞』は同胞社（米国加州羅府南スプリング街三三〇番地）が発行。一九八八年八月二十日、お茶の水書房復刻発行。

三月一日、「希望館」（小説）を『中央公論』に。

三月五日、「家鴨の子たち」（小説）を『土曜日』に。

四月一日、「あの頃の日記」(随筆)を『文学案内』に。
 四月一日、「美しき自然」(小説)を『若草』に。

七月一日、「清水焼風景」(随筆)を『長篇小説』に。

〃八月一日、「帰郷」(小説)を『改造』に。

九月二十日、「紀行文を出す 高見順」「流木」(文芸十月号)を『随筆』を『帝国大学新聞』に。

〃十月二十日、「清水のあたり」(小説)を『京都帝国大学新聞』に。

十一月二十日、「流木余談」に就いて 高見順に与ふ(随筆)を『日本学芸新聞』に。高見順「流木」余談 庄川問題は更めてかく(『帝国大学新聞』同年十月二十日付)に対する反論文。

〃十一月二十日、「掘り出された一つの生活 島木」(生活の探究)をよむ(随筆)を『帝国大学新聞』に。

十一月、人民戦線事件で検挙された。『学生評論』『世界文化』『土曜日』等の集団はすべて破壊された。四十日余り残酷な拷問で取り調べられたが、何一つ証拠はとられなかったので、十二月末、執筆禁止を言い渡されて釈放された。再び廃人同様の体になり、病氣再発。

(編者注)

『土曜日』第二十八号(一九三七年三月五日発行)五面に「古本屋をはじめますから不用の本を売って下さい。」との大阪市南区の津国登一の名刺広告が掲載されている。その名刺広告の左横に加賀耿二の応援の言葉が記されているので左記に紹介する。

友人津国が古本屋をはじめました。彼は京大の経済学部を出て暫く大阪朝日新聞に居た男です。士族の商法になるのではないかと思ひますが立派な古本屋を期してをるさうですから御後援を願ひます。

加賀耿二

一九三八年(昭和十三年) 三十九歳

〃二月、衣笠貞之助を知り、病床にあつてシナリオ・ライターになる(筆名・田井善三)。続いて松竹下加茂撮影所に関係した。この頃、保護観察付となり、知恩院の某僧侶が月二、三回来て訪問者名や手紙を点検していった。七月、衣笠貞之助を中心にして新日本映画研究所を設立した。暗い谷間にあつて新しい進歩的な歴史映画を作ろうという運動だった。

四月十八日、「東京への手紙 青葉の京都から」(随筆)を『帝国大学新聞』に。

〃十一月二十日、「柿の話」(随筆)を『京都帝国大学新聞』に。
 十二月一日、「山蘭」(小説)を『若草』に。

(編者注)

六月一日、『新映画』(新映画社発行)第八卷第六号掲載の佐藤邦夫「時代劇映画の前進―新日本映画研究所の創立―」には左記の様に書かれている。

かくて、衣笠貞之助氏は、先づ「シナリオの貧困」を救ふ道を求めた。そして自費を投じて、京都市上京区河原町今出川西入ル下ル(米屋町)三〇四番地に、前記、研究所を設立したのである。かくて集められた新しきシナリオ・ライターアのメモバアは、日活、内田吐夢作品「土」東宝京都今井正作品「沼津兵学校」のシナリオを書き、キノ・ドラマ「噺う手紙」に衣笠氏と協力した八木隆一郎「綴方教室」劇化担当者古川良範、同じく新築地劇団文芸部の土井逸雄、並に新進作家加賀耿二等の諸氏である。

六月十七日、映画『黒田誠忠録』封切。原作新日本映画研究所、脚本本田井善三、監督衣笠貞之助、主演阪東寿三郎。

『週刊朝日』第三十三卷第二十四号(五月第二増大号)の「松竹京都撮影所 本年度超特新作『黒田誠忠録』撮影スナツピス」は左記の様に内容を紹介している。

「我国封建時代におこつた所謂お家騒動の中でも歴史的に

谷口善太郎・執筆年表(著作目録)上

見て一番主題に積極性のあると思はれる所謂「黒田騒動」が彼(編者注・衣笠監督)には好適なものとされたのである。」

「初め企画されたときから七年、三度目に製作実現したことになる。」

「この物語りは寛永十年、九州一の大大名黒田家の当主忠之を相手どつて家老栗山大膳が幕府へ訴へ出たまでの経過を描いたもの」

「映画の芸術性からいつてもリアルな描き方として取り入れられたものに、遠賀の疎水工事と森林伐採、および鳳凰丸の造営がこの物語りのテーマと緊密な結びつきにおいてスペクタクル・シーンとして描き出され、この映画を前述(編者注・お家騒動ゆえの色気と変化の乏しさ)の危険からも救ひなほその上の中のある作品にしてある。」

『スタア』六月下旬号(六月十五日発行)掲載の片山公夫「黒田誠忠録余聞」には左記の様にある。

「松竹下加茂は、今や『黒田誠忠録』の撮影にひつくりかえるやうな騒ぎである。」

と云ふのは、この映画は松竹時代劇としては「大坂夏の陣」以来の大作で、製作費実に二十万円を越へるスーパー・スペツシャルであるからだ。」

「津市の海岸へ建てた、高さ八間、長さ二十二間と云ふ途方も無くデカイ鳳凰丸のオーブン・セット」「こいつを勿体なくもポウポウ燃やしてしまった。」

『キネマ旬報』七月廿一日号（NO・652）掲載の「日本映画批評」欄には「黒田誠忠録」（友田純一郎）がある。

「会社の命令で不本意ながらする仕事のなかにも、衣笠貞之助個人の勉強をして行く道があるわけだが、講談をネタとした映画のつまらなさは蔽ふ可くもない。」

「この映画に於ける騒動の因は人間生活の姿から遠いこと近代意識を以てはどうにも首肯し難い」「規模の大きいこと、並に寿三郎の演技等のみものである。」とある。

衣笠貞之助「『黒田誠忠録』に関連して―年少の友Rへの手紙」（『キネマ旬報』六月廿一日号〈NO・649〉）の中ではこう書かれている。

大体自分が構成して田井善三君に脚色させた。／田井君は小説家で、小説は相当問題になつたものを幾つか書いている人だが映画の脚本を書くのは始めてなので技術的なことは知らないが斯した人の考への中には僕達では考へつかないである良いものが沢山あることは嬉しいことだつた。（田井君は新日本映画研究所の新らしいメンバーの一人だ。）

一九三九年（昭和十四年） 四十歳

二月、長女・佳子誕生。三月、新日本映画研究所が弾圧され、七月、解散。十二月、松竹撮影所を首になった。窮乏と孤立の中で病をやしなうのみ。

四月四日、「溝口健二を囲んで」（座談会）に出席。『新映画』第九巻第五号。出席者は、溝口健二、八木隆一郎、土井逸雄、古川良範、絲屋壽雄、久保田辰雄。

八月一日、「強い勝子」（小説）を『若草』に。

十一月五日、「秋葉東三氏著小説『西陣』を読む」（書評）を『京都帝国大学新聞』に。

（編者注）

「加藤年譜」の「強い勝子」は間違ひ。「勝子」は「かなこ」と読む。「縁起をかついで」（作品集『工場へ』の「あとがき」）「しる」。「からげる」の意味を出した。

秋葉東三著『西陣』は、一九三九年十月一日、慶應書房刊。徳永直が序文（『西陣』への感想）を寄せている。

一九四〇年（昭和十五年） 四十一歳

四月から六月にかけて、中央公論社特派員として友人・絲屋壽雄と中国大陸へ渡つた。「宣撫班」に属していた劇作家青江舜二郎から毛沢東の「持久戦論」「遊撃戦論」を得、中国人民必勝の信念を得て元気を回復して帰国。

一月二十日、「大糸年夫氏著 幕末兵制改革史」(書評)を『京都帝国大学新聞』に。

三月一日、「立札」(小説)を『中央公論』に。

三月五日、「春の彼岸」(隨筆)を『京都帝国大学新聞』に。

三月二十八日、『工場へ』(四六判、厚紙装、三二七頁、一円八十錢〈外地定価一円九十八錢〉装幀・柳瀬正夢)を東亜公論社から刊行。工場へ／少年／あの頃の日記／或る正月／夕しぐれ／港一瞥／裸になる女／清水のあたり／或る百姓／山蘭／強い膝子／あとがき、を収録。

四月一日、「石を投げる」(小説)を『政界往来』に。

十月二十日、「枝から枝へ」(隨筆)を『京都帝国大学新聞』に。

(編者注)

「加藤年譜」は「文化工作隊の部隊長をしていた劇作家青江舜一」と書いているが間違っている。

大糸年夫著『幕末兵制改革史』(日本歴史文庫)は、一九三九年十月五日、白揚社刊。

「立札」を掲載した『中央公論』の「編輯後記」には、「久々染筆の加賀氏はその不撓と強靱をまざまざと近写するの快。」とある。

「石を投げる」は、『工場へ』の「あとがき」に、「清水のあた

り」(昭和十二年五月、京大新聞)極く最近、これに前半を書き足して一篇の小説を作った。」とある。

「京の秋―二景」欄の「洛東」に「枝から枝へ」は書かれた。「枝から枝へ」と改題して、『つりのできぬ釣師』に収録。

『工場へ』に収録する際に、一九三七年の「あの頃の日記」は「時局柄不穏当と思はれる部分を削った」と「あとがき」に書かれている。初出の次の箇所は削除された。

今日は：が二度も来た。朝、自分を受持つてゐる……：がいつもの通り来て、午後本部の：が別にやつて来たのである。動けない病人にも嚴重な監視である。本部の二人は通り土間から裏へ廻つて無遠慮に病室の障子を開けた無礼な奴らだ。何か見舞に似た言葉を述べてあとこんなことを云つた。

「しかし、もう大分よささうぢやないか。もうそろそろ公判を願出てはどうだい。」

自分は黙つてゐた。治男も、もう今では彼等の型ケイから何かを嗅ぎつけると見えて、彼等の居る間マちう不安な瞳をして自分の枕元からはなれなかつた。

削除されたままの「あの頃の日記」は復元されることなく、『つりのできぬ釣師』に収録された。

「裸になる女」の初出は「夕刊大阪新聞」であると『工場へ』の「あとがき」にあるが、原物を確認できなかつた。

「或る百姓」は「暁前の死」を改題したものであると『工場へ』の「あとがき」にある。

一九四一年（昭和十六年） 四十二歳

九月、保護観察司が新興キネマの永田雅一にかわり、永田のす
すめで、新興キネマ（後の大映）京都撮影所に入社、脚本部長と
なる。大映では、月一回永田雅一の演説をきくこと、企画会議に
出席し、何本かの脚本を書くことだった。

一月二十日、「国際列車」（小説）を『京都帝国大学新聞』に。

三月三十日、「農村は戦つてゐる」（ルポルタージュ）を『週
刊朝日』に。「本誌特派」とある。『京都近代文学事典』（二〇
一三年、和泉書院刊）の「須井一」（すい・いち 堀部功夫執
筆）によつて初めて紹介された。

四月一日、「元氏の二日間（北支の印象より）」（随筆）を『大
陸』（改造社）に。

六月十日、「むかしの新聞」（随筆）を『時代映画』第十七輯
に。同誌の「時代映画をどうするか座談会」に「谷口善太郎
（作協）」として出席。他の出席者は、辻吉郎、寺門静吉、森一
生、倉谷勇、八尋不二、原健一郎、依田義賢、民門敏夫。

八月一日、「北支の農民（調査報告）」（論説）を『中央公論』
に。十月まで三回連載。

八月五日、「京の夏」（随筆）を『京都帝国大学新聞』に。

十二月一日、「座談会 文化人の決意を語る」（『西日本』第
一輯）に出席。出席者は他に尾関岩一、織田作之助。『西日本』
は日本文化社（京都市東山区）発行。「ニッポン新聞」改題。

十二月十日、「短冊形の阜―北支の百姓について」（北支農民
事情）（随筆）と副題が横書き）を『不動産時報』（不動産経済研
究所発行）に。

（編者注）

「北支の農民」の九月号の副題は「経営について」、十月号の副
題は「―その生計について―」である。八月号の「あとがき」に
左記の様にある。

加賀耿二氏の北支の農民は百余枚の長篇であり、その調査
の綿密精到は得難き文献として注目されることと思ふ。

前掲『時代映画』第十七輯の「作協通信」欄にはこう書かれて
いる。

この日の委員会（編者注・同年一月九日）は、時代劇映画
強化の為のオリジナル・シナリオ製作の必要が提起され、そ
れには国策に順応した映画脚本の創作委員会をもつことが必
要だといふことになり、委員推薦で幹事長に依田義賢、幹事

に谷口善太郎（新興）、榎本宏一（日活）、土井逸雄（松竹）を推し爾後毎月一回同委員会を開催することに決定。

『時代映画』は、「日本映画作家協会関西部 時代映画編輯所」発行。

一九四二年（昭和十七年） 四十三歳

二月、「鏡」を『西日本』（未見）に。（編者注）「加藤年譜」では前年の一九四一年一月、「鎖」『西日本』とある。一九四三年の項を参照のこと。

四月十五日、「座談 技術合評 第一回・後篇 元禄忠臣蔵」をめぐって（『映画脚本』第二十二輯）に「谷口善太郎（作協）」として出席。出席者は他に、寺門静吉、寺島貢、奥吉宥、御手洗一夫、毛利喜久男。

『時代映画』誌は、一九四二年の第二十一輯から『映画脚本』と改題した。

『映画脚本』第二十三輯（十月一日発行）の「脚本家消息」欄には左記の様にある。

大映京都第二、谷口善太郎―「桃山御殿」と「菅沼貞風」を持つて苦闘中。

『映画脚本』第二十四輯（十二月五日発行）の「脚本家消息欄」（ママ）には左記の様にある。

大映京都 谷口善太郎―高杉晋作を扱った海峡の風雲児をシナリオ化中。

一九四三年（昭和十八年） 四十四歳

二月十五日、協同出版社刊行の『現代出版文化人総覧（昭和十八年版）』の「現代執筆家一覧」には左記の様にある。直近の作品については、「昭和十六年以降昭和十七年五、六月頃まで」を対象としたとある。

加賀耿二 明三二生／本名 谷口善太郎／京都市東山区清閑寺霊山町五ノ石川／現職 大映京都第二撮影所脚本部員／小説、映画脚本、農民問題評論／日本文学報国会小説部／1、綿（改造社）清水焼風景（同）血の鶴嘴（文学案内社）2、北支の農民（中央公論8―10）元氏の二日間（大陸3）鏡（西日本）

四月一日発行『映画脚本』第二十五輯の「映画脚本作家名鑑」（編輯部調査）欄には左記の様にある。

谷口善太郎（大映京都）

須井一と称し作家生活の後、加賀耿二の名で衣笠貞之助の協同一致プロに加盟し、それより新興京都を経て現在。「黒田誠忠録」「海峡の風雲児」。京都市東山区清閑寺霊山町五

十二月十二日、映画『海峡の風雲児』封切。原作木村毅、脚色田井善三、監督仁科熊彦、主演風寛寿郎。

『海峡の風雲児』の原作は、木村毅著『海峡の風雲児』（一九四一年八月十日、春陽堂刊）である。関門海峡の風雲児高杉晋作の新婚から死去までを描く。「彼が一蹴しなかつたら、彦島は日本のマルタ島となつて、今日まで禍根を残してゐただろう。」（同書一九九頁）というのが木村毅の原作のテーマである。

『新映画』（昭和十九年一月一日発行、創刊号、日本映画出版株式会社刊）所収の「新映画評」欄に、「海峡の風雲児」（早田秀敏）がある。「開港論者の高杉が敢然攘夷に転換するくだりなども描写が安易なために感銘が薄い。」「結局はこの映画が小説からの借り物であり、技術者の肚からつくられたものでないから」と書かれている。

一九四四年（昭和十九年） 四十五歳

三月、長男一雄死す。第二工業学校で特攻隊に志願しなかつたため配属将校らに睨まれ、霰の中で匍匐前進を三日間強制され、肺炎、肋膜炎、結核を発病し、一年三ヶ月病臥していた。河上肇と

再会。激励を受ける。

九月一五日、「国際列車」を『文芸探求』通巻第十三号に（再録）。

（編者注）

『文芸探求』誌は京都青年文学会発行。加賀耿二は眞下五一、淀野隆三、木村哲二とともに同会の「顧問」となっている。「国際列車」の末尾には左記の様に記されている。

附記―本稿は三四年前一度発表したものであるが、本誌への寄稿の責が重なつた苦しまぎれに、いまや、手を入れて間に合はさして貰ふことにした。旧稿を発表した責はもとより自分にあるのである。（加賀）

一九四五年（昭和二十年） 四十六歳

春ごろ、原作「狐の呉れた赤ん坊」（菊池寛の命名）が採用になる。演出・丸根賛太郎、主演・阪東妻三郎。三月、丹波胡麻郷に移住。家族を農村に移し、開拓農民となる。八月、終戦を開墾地で迎えた。

十一月八日、『狐の呉れた赤ん坊』封切。

十一月、「蕎麦まき」を『新生日本』（大阪新聞社刊・未見）に。「つりのできぬ釣師」に収録。

(編者注)

映画『狐の呉れた赤ん坊』の同時代評を紹介する。

一九四五年(昭和二十年)

十二月七日(金)『時事通信 文化芸能』第七号 無署名

「新映画紹介 狐の呉れた赤ん坊」(大映作品 原作 谷口善太郎 丸根賛太郎)

十一月十日(土)『時事通信 文化芸能』第八号 無署名

「新映画検討 狐の呉れた赤ん坊」―「予め設計された構成の妙味は、成程とうなづかせるものがあるとしても、それではその中心に一体何があるかといふ段になると、実は甚だ怪しい」

一九四六年(昭和二十一年)

一月一日、『新映画』(日本映画出版株式会社発行)第三卷

第一号 双葉十三郎「新映画評 狐の呉れた赤ん坊」―「全体としては速度もあり、この演出者も漸くにして映画の勘を体得し得るに至つたのではないかといふことが仄かに窺はれる。」

三月一日、『キネマ旬報』再建第一号 滋野辰彦「狐の呉れた赤ん坊 大映京都作品」(原作谷口善太郎 丸根賛太郎)

―「子供の将来のために手離すといふあたりの愁嘆場は、全体の喜劇的な表現とうまく調和がとれてゐない」―「ともかく

も映画の裏に作者の影が感じられるので、この点は喜びとしなければならぬ。」

昭和二十年十二月四日(火)『時事通信 映画芸能』第二十七号掲載の登川尚佐「終戦後の京都」が当時の状況を伝えてくれているので左記に一部を引用する。

京都の繁華街は、虚脱と放心の群衆で朝からこつたがへしである、劇場はいづれ劣らぬ大入り満員中でも、「狐の呉れた赤ん坊」の帝国館など、行列のすさまじさが気の毒で少しづつ切符を売つてゐるが中は廊下に溢れた観客が背のびをしてセリフのきこえぬ映画をみている、立ん坊の汽車旅行でも運賃を払つた処までで行けるものだ。

(一九四五年は終わり。以下次号)
(はた・しげお 大阪府立桜塚高校)